

京都大学総合人間学部広報

特集 ご退任を迎えられる先生方から

映画研究教育の活性化時代.....	加藤 幹郎.....	2
京大での思い出.....	道簾 泰三.....	4
退官雑感.....	佐伯 啓思.....	6
大学と革命（笑）.....	菅原 和孝.....	8
大学施設に透けてみえる時代と社会の精神.....	伊従 勉.....	10
住まうことと教養.....	西垣安比古.....	12
化学実験の思い出.....	山本 行男.....	14
京大での生活を振り返って.....	松井 正文.....	16

外から見た「総人・人環」

動物と人間の動きに想う.....	小田 伸午.....	18
・（なかぐろ）の意味.....	三谷 恵子.....	20

特集 ご退任を迎えられる先生方から

映画研究教育の活性化時代

加藤 幹郎（人間科学系）



日本における映画学の成立

30歳で京都大学教養部助教授（現在は「総合人間学部准教授」と名称変換されている職種）に就職させて頂いて以来、京大で28年間もアメリカ映画史を中心に研究教育させて頂きました。当時、教養（学）部は、京都大学でも東京大学でも「自由な」学部のひとつでありましたから（現在もその主旨は強調されています）、小生自身は映画学が国立大学にはなかった学部時代、大学院時代はフランス文学、アイルランド文学研究を実践していました。

アイルランド人の世界文学史上最大のジェイムズ・ジョイスとサミュエル・ベケット（後者はノーベル文学賞受賞のさい、授賞式には出席せず、自分の偉大な先行者たるジェイムズ・ジョイスがノーベル文学賞を受賞されるべきだったと考えていました）、両者はともに映画と緻密に関与するすぐれた文学作品も執筆していたので（ジョイス作『ユリシーズ』ならびにベケット作『フィルム』）、小生が大学院時代まで文学研究者だったにもかかわらず、30歳で京都大学教養部助教授に就職させて頂いた翌年から、教養部では映画学の授業をしても結構ですと指示されて、小生自身も、それから四半世紀間、映画学研究者になり、その結果、日本の多数の主要大学に映画学の科目が拡大浸透し

ていきました。それは京大総長のみならず、教養（学）部時代の学部長たち、そして人間・環境学研究科時代の研究科長たちのおかげでもありました。

また京都市自体が、日本における映画産業ならびに世界映画史上最高水準の映画作品を制作する最初の場所でもありましたから、小生が京都市に30歳で来させて頂いたおかげで、日本映画研究も進行できました。

それゆえ指導院生たちは、早稲田大学准教授、神戸大学准教授、関西学院大学准教授、その他、京都市内の私立大学のみならず外国の大学でも映画学研究者として、すぐれた仕事をしています。またPDとして各地の大学院で映画研究を続けている者たちや、東京国立近代美術館フィルム・センターの研究者たちにもなったり、NHKのディレクターになったりもしています。

映画の先行メディア

小生が文学と絵画に大変興味があったうえて、映画学者に移行した根拠はつぎのような説明ということにもなります。映画学の意義はつぎのような先行メディアに由来するからです。映画は、本来、「演劇」と「写真」の二項目、さらに「文学（戯曲、小説、脚本）」と「音楽（音声、環境音）」と「絵画」の合計五項目の並行合体から充実しはじめると言うことができます。そして、その先行史上の五大メディア（演劇、写真、文学、音楽、絵画）から、新規メディアム（媒体）たる映画が

斬新的に活性化するのが映画の身体と身体的映画なのです。演劇舞台で生身の俳優の身体運動を見るよりも、映画スクリーンで俳優身体を見るほうが圧倒的多様性と細密的多義性を（また当然、運動時間のねじれすらも）堪能できるからです。むしろ、映画の身体性は写真や絵画の画期的身体描写とも連繫します。しかし写真や絵画が静止画像でしかない以上、映画撮影における動画像と静止画像の合体による紆余曲折たる身体的映画の斬新性こそ、映画ミディアムの独創的有機性となるということになります。

映画テクノロジー変遷

小生が小学校時代の1960年代にテレビ受像機が、また大学院時代の1980年代にはテレビに接続するVCR（ビデオ・カセット・レコーダー）が先進諸国のほぼ全家庭に浸透します。それ以前は、映画は多数の観客が一堂に会する映画館（film theater）で見るものでした。むしろ、ホーム・シアターの概念と実践は1910年代からありました。しかし、映画館で上映されるのと同じ長篇作品を家庭で見るとは、1980年代以降のホーム・ビデオ期まで一般化しえなかったのです。なぜなら、テレビ主流時代に家庭でテレビ映画を見ても、映画館で上映される普通の映画（約90分）は短時間化され、しかも放映中に何度もCF（コマーシャル・フィルム）が挿入されたので。

個人と全体

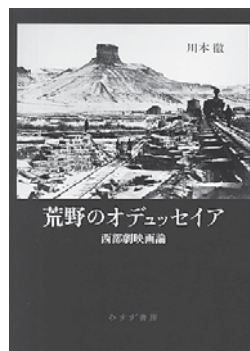
映画館で映画を見ることは、暗闇内でスクリーンに投射された光の反映を観ることになります。言いかえれば、映画館はスクリーンからの反射光が太陽光と溶融しないように闇黒を留保する必要があります。そして映画館での映画上映中の闇は、自分が他の大勢の観客とともに同じ場所を共有しているということを忘れさせます。映画作品

は多数の観客に共有されることを前提として製作されながら、上映中には観客の個人的体験（物語映画の主人公への独自の感情移入）として受容されることが多かったのです。それゆえ、映画は物理的には個人が多数となる場所を前提としながら、心理的には多が個となる状態を産みだす装置と考えられました。

しかし映画館のこの性癖は、当然、大衆という名の巨大な均質集団を構成することにも通じました。基本、誰もが個として映画を享受しながらも、多数の観客が映画館で同じ物語映画を共有することで、巨大なマス（ひとかたまり）も構成されました。一本の映画作品が世界中の映画館で何百万人もの観客に共有されることは、他のマス・メディア＝マス・コミュニケーションの拡大化と軌を一にして、20世紀最大の大衆社会を形成しました。20世紀は個人が全体として集約される時代でしたが、それは映画館で映画を見る個人集団の体験に通じることにもなります。

そして個人と全体、人間同士の共有関係の地理的、歴史的困難性は全世界でも長期間、現在もつづいているわけです。

（かとう みきろう）



指導院生（現在 PD）の映画研究書籍
川本徹著『荒野のオデュッセイア—西部劇映画論』（みすず書房、2014年刊行）



アメリカの古典的映画館（カストロ館）
（指導院生（現在 M2）撮影）



アメリカの古典的映画館（パノラマ館）
（指導院生（現在 M2）撮影）

特集 ご退任を迎えられる先生方から

京大での思い出

道簾 泰三 (国際文学系)



もう三十年も昔になる。幸運にも、時間の停止した隠沼のような弘前の町から、時の坩堝のごとき騒然たる京大教養部のまっただなかに呼び戻してもらったとき、ぼくはまだまだ若かった。キャンパスを歩いていると、目を輝かした学生が駆け寄ってきて、クラブ勧誘のビラを手渡されたこともしばしばだった。若かっただけでなく、血の気の多い鬱屈した一人よがりでもあった。赴任当初の新顔だったとき、いきってサングラスをかけていたせいもあってか、教養部正門を入ったところで、哨兵きどりの白ヘルの兄ちゃんに公安の回し者じゃないかと突っかかられた笑い話めいた一幕もあった。「どこのモンや、身分証明書を出せ」、「オマエらこそどこの馬の骨や、学生証を見せろ」などと怒鳴りあって、あやうく隣のショーケン館（今はもう焼けて失くなったが、かつてはチューカクの連中のアジトようになっていた）にひきずり込まれそうになった。このときはたまたま同僚のドイツ語教室の先生が通りかかって一喝、ことなきをえたが、引き離されると、しきりに何やら吠えつづけていたように覚えている。オレだってこの退屈きわまる世の中で、オマエらみたいにメットかぶって棒もって暴れたいんや、といった分けのわからないくすぶりと苛立ちを、たまたま袖すり合わせた彼らに腹立ちまぎれにぶつけたのかもしれない。

教養部ドイツ語教室——当時は、現在の「部会」といった便宜的区分によっただけの無味乾燥な呼び名ではなく、「教室」というれっきとした呼称

のもとに何か内側から自己主張しているような雰囲気があった——は、そんなおっちょこちょいの若造を、野放しにしながら守り育ててくれた。いや、本当をいえば、この教室自体が、伝統的に、どこか普通の尺度では測れないような狂気じみたところをもっていて、ぼくはその囲いのなかで、おののきながらもぬくぬくと育てられていったと言ったほうが正しいかもしれない。出だしからしてからそうだった。新任の歓迎会をしてもらったとき、酒席のどこかで何やら喧しい議論が起こったかと思うや、一人がいきなり立ち上がって相手の首根っこをつかみ、階段から落としたと、やり出した。まわりが必死になってその場を収めたが、このときぼくは、えらいおもしろいところに来たなあ、とちょっとびびったものだった。夜も更けた二次会でも、何の議論の最中だっただろう、また別のおひとりがグラスをひっつかんで店の壁に叩きつけたりして、なかなか不穏な空気が漂っていった。こうした激しさ、過激さには、たしかに容易に溶け込めないところはあった。しかしこのとき、それ以上にぼくの心に強烈に焼きついたのは、みんななりふりかまわず必死に生きているんだな、といった好ましい印象だった。この先こうした（青春まっ盛りの）人たちの端くれとして仲間に入れてもらえるのは何よりの幸せじゃないかと、むしろ頼もしくほっとしたのを覚えている。

必死になって今を生きる、むろんそれはどんな研究にも欠かせないものだろう。ドイツ語教室には、勉学・研究の面でもそうした姿勢がとりわけ強烈に脈打っていたように思う。のちにこれらの先輩たちと研究会をもち、ぼくがベンヤミンについて発表をしたとき、ある先輩が発した一言をぼくは今も忘れることができない。「ベンヤミンを研

究してりゃいいというわけじゃないんだよ、君。君自身がベンヤミンにならなけりゃだめじゃないか」。研究とはただたんに、不整合を退けて解釈の筋を通したり、ともかくがむしゃらに新規なものを打ち出すことではない。そうした格闘のなかから、今を批判的に見、今をまっとうに生きるためのアクチュアルな思考をもぎとってくることだ。あたりまえのことだが、これがドイツ語教室の先輩たちとのつき合いのなかで骨身に叩き込まれたことだったように思う。ぼくは今なお不十分なまま、中途半端なゴマカシのなかでふらふらしている。しかし、ふらふらしながらも、いつもあの言葉に背中を押されるようにして、しゃんとしようとする気持ちだけは失っていない。この気持ちこそ、ここ京大でいただいたこの上なくすばらしい財産だとも思っている。のちに教養部が組織変えになって、研究室での院生さんたちとのつき合いが始まったとき、ぼくは、力足らずとはいえ、いつもこの気持ちだけは若い彼らに植えつけようと躍起になっていたような気がする。

アナタたち何トモシクハ誰ト闘ウタメニ大学ニイテ勉強シテイルノデスカ。面と向かって口に出せば気恥ずかしいかぎりだが、これが、ぼくが院生さんたちに終始向けていた問いかけであり、自分自身にぶつけていた問いつめでもあった。ろくでもない授業をしているときも、くだらない馬鹿話をしているときも、いっしょに大酒を飲んで頭が痺れているときも、いつもどこかにわだかまっていたのはこの問いかけだったように思う。研究室で十年もの長きにわたり皆で雑誌作りに精を出したのも、たんに業績作りのためだけではなく、そもそもの狙いはこの問いかけにあった。何度も研究室に集合しては、酒を飲みながら、自分たちの書いた原稿を皆の前で披露する、そして他の人たちから思いがけない攻撃を受ける。これは彼らにとって、自分の研究の根幹——何ト闘ッテイルノカ——を再度自分で問い直す作業でもあったように思う。

ともあれ、院生さんたちとのこうしたつき合いが、ぼくのこれまでの教員生活のなかでいちばん張り合いがあり、刺激的で、また楽しいものだった。なかでも小豆島や羽咋などまで遠出しての合

宿は、楽しい思い出として記憶に残っている。各人が、日本の文学などをネタにして、日ごろ自分が研究しているテーマからまったくはずれた何かを喋ること、そして倒れて眠ってしまうまで酒を飲むこと、これが合宿の掟のようなものだった。夜更かしした明け方、大広間で学生さんたちが、討ち死にした兵士や打ち上げられたマグロのように、思い思いのところにばたばた倒れて眠りかけている光景を、ぼくは今も楽しく思い出することができる。

最後にひとこと、ぼくの好きなオマジナイを記させていただく。「ダイセンジガケダラナヨサ」。これは、『唐詩選』のなかの一句「人生是別離」を井伏鱒二が「サヨナラダケガ人生ダ」と訳し、それを寺山修司が逆さまにひっくり返し、浅川マキが裸足で歌ったものだ。一説（田中英光）によると、日本語の「サヨナラ」は「さようならなくてはならぬ故にお別れします」という日本的無常観に貫かれたものらしい。寺山修司はこの字づらを逆さまにすることによってこの日本的無常観なるものを逆転させようとしたと、その真意はともかく、ぼくは強引に受け取っている。今年度かぎりではぼくは京大とサヨナラになるが、ハイチャこれできっぱりお別れよ、ということにはならない。サヨナラを告げつつも、京大での三十年間の右往左往が、この先かたちを変えてぼくのなかで反復しつづけることを願っている。

（みちはた たいぞう）



2013年、羽咋の海岸にて（池田浩士さんにも参加いただいた）。

特集 ご退任を迎えられる先生方から

退官雑感

佐伯 啓思 (国際文明学系)



前任校の滋賀大学から京大に移ったのが平成5年ですから、22年ほどいたことになります。結構な月日が流れたのですが、いつごろからか、と

もなく退官が待ち遠しくなっていました。実際、長くいすぎたような気もします。

私は、どうも、細かいひとつの事項や資料をずっと調べるといった研究的態度が苦手で、しかも本を読むことさえあまり好きではありません。というわけで、学者、研究者という自覚がまったくもてず、もっと積極的にいえば、学者、研究者には向いていないという自覚はかなりしっかりとっており、こんな調子で大学で働いていてよいものか、という違和感をずっと抱いていたのでした。

といっても、では「普通の」サラリーマンに向いているかなれば、これはもうやってみるまでもないことで、となれば、やはりあまり「普通」でない大学人しかなく、結局、大学では最低限の義務をこなしつつ、自分の好きなことをやろう、というあたりに着落したのでした。

というわけで、公式的にはいえませんが、大学での滞在時間の極小化をはかり、これはただ通勤上の都合なのですが、ほとんど正面口は利用する

ことなく、行きも帰りも西門から出入りするという22年でした。

その代わり、というわけでもないのですが、酒も飲まないくせに祇園の滞在時間はけっこう長く、かの地に投じた時間と金銭を有効活用しておれば、多少はまともな仕事でもできたのに、といういくぶんの悔恨を感じないわけではありません。しかし、そうはいっても、かの地でなければ学べないことも結構あり、比較しても仕方ありません。

「水商売」という語義がどのあたりにあるのかは知りませんが、すくなくともそこには、水で薄めたものを虚飾や見せ掛けで水増しして売る、といったような意味があるのでしょうか。私は、水商売を別に悪いことだとも困った商売だともまったく思いません。客もそれを承知で来ているからです。花街で水商売をすることには何の問題もありません。

しかし、これが、白昼堂々と、町の真ん中でやられるといささか問題ではないでしょうか。だけれど、昨今の大学をみていると、大学が水商売をやりだしているように見えてしまうのです。

別に京大に限ったことではありません。どこの大学も、学生を確保し、己を社会に売り出し、運営資金を獲得するのに必死なのです。そのために、やたらグローバル云々といい、国際化云々といい、

改革・改革といい、カネをえるために、水増しされた研究成果や、改革成果を誇示しようとしているようにも見えるのです。

もちろん、これも大学に限ったことではありません。メディアもそうです。メディアによく顔をだす知識人や専門家なる人たちのかなりもそうでしょう。ほとんど日本の国中で、ともかく、水増ししたり、水で薄めたり、虚飾であれ、偽造であれ、バレなければよし、とばかりにカネに群がるといった風景が広がっているように、私には映るのです。この国中をあげた水商売を、あたかもすばらしいことのように喧伝し、あろうことか、その商売方式に従わないものは、時代遅れのトンチキといった風潮にさえなりつつあるのです。

もっとも、そんなことをやっても、いずれはバレるもの、つけは回ってくるもの、という簡単な真理に、われわれは昨年、いやというほど気付かされたはずですが。

やはり、水商売は花街で日が落ちてからやるもので、日中に堂々とやってはいけません。人の仕事を奪うものではありません。

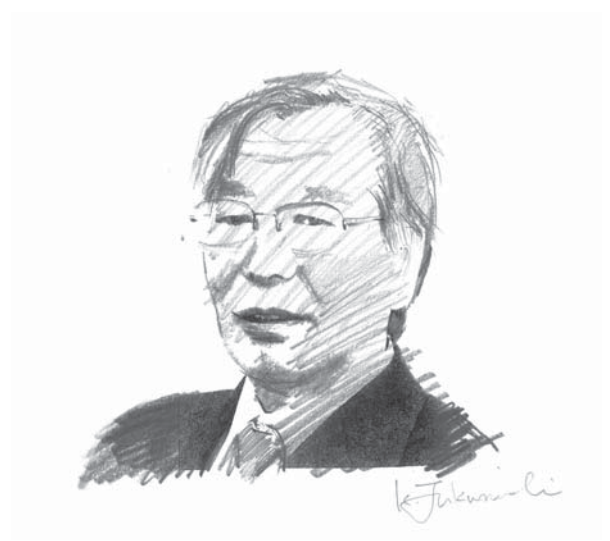
最初の話に戻りますが、もともと、学者になりたいとか、研究者になりたい、というほどの抱負も人生設計も何も私にはありませんでした。大学院では経済学を専攻しましたが、それがそもそもの失敗で、この種の学問に著しく不向きであることはすぐにわかりました。その後は、いったい自分は何を求めているのか、といういわば自己探索だけをやっていったような気がします。

大学院はでたものの、仕事もなく、タマタマ公募していた広島修道大学という私大に救っていただき、続いて、これもタマタマある知人に誘われ

て滋賀大学に移り、さらには、ある日、まったく一面識もないある方からの電話で京大へ誘われました。これまた何も考えもせずに、その電話で受けてしまったのです。そもそも総合人間学部だとか人間・環境学研究科だとかが何ものかなど、まったく知りませんでした。またまた、タマタマ来てしまったというわけです。

ことほど左様に、ただその時々さしたる考えもない選択に人生を委ねてきただけなのですが、結果とし、京大に身を置くことができたことはたいへんな幸せでした。よくいわれる「自由な学風」というものを、かろうじて保っている大学は他にはないでしょう。今頃になってようやく、自分がなにをやったかったのか、私にとって大事なことは何なのかが、多少の確信をもってわかるようになってきました。えらく時間がかかったものです。本当に「思えば遠くにきたものだ」とでも口ずさみたくくなります。しかし、それも京大という空間に身をおけたからこそだと思います。改めて、同僚のみなさん、職員の方、そして研究室の院生さんにも感謝したいと思います。

(さえき けいし)



特集 ご退任を迎えられる先生方から

大学と革命（笑）

菅原 和孝（文化環境学系）



まさかこれほどお先真っ暗な時代に京都大学を去ることになろうとは予想もしていなかった。旧教養部に赴任したとき、社会学教室の大黒柱は高橋三郎先生だった。

その後私は先生を「大衆文学の鬼」と呼んで畏敬してきた。ここ数年、先生は年賀状に「これほどひどい社会になるとは思ってもみなかった」あるいは「何もかもが劣化している」と書きつけておられる。三郎先生の危機感を同僚・学生みなさんにリレーしておきたい。

大学で研究労働に携わる人間がもっとも憧れるのは「知の革命」の一翼を担うことだろう。だが、小文の標題が意味するのは、現行の社会システムを根本から変える革命のことである。もちろん、人文社会系の多くの研究は、このような政治運動を直接的に造りだすことはない（マルクスに由来する思想潮流は希有な例外である）。にもかかわらず、私は、認識の徒として生きる決心をしたときから、自らの思考が気の遠くなるほど間接的な回路を通して民衆のもとに届き、人びとを力づけること夢見てきた。

霊長類研究所の大学院に所属しニホンザル研究が軌道に乗り始めた修士2年目の初夏、同学年の松村道一としめしあわせ、憧れの「美人秘書」2人を犬山駅前の居酒屋に誘った。心理部門の城さんが「スガワラさんはどうしてお猿の研究なんかしてるの？」と尋ねたので、私は反射的に「人民を解放するために」と答えた。自分では冗談で言っ

たつもりはまったくなかったが、生理部門の永井さんは呆れて私の頭をこずいた。このやりとりを、モンキーセンター研究部の水原洋城さんと、私が大学院入学前からお世話になっていた形態部門の渡邊毅さんとが目撃していた。毅さんによれば、「城さんは思想的にスガワラを粉碎し、永井さんは肉体的にスガワラを粉碎した」と水原さんが評したそうだ。その後、永井さんは私の妻になり、城さんはかつてA闘で暴れていた木村光伸と結婚した（彼は南米の広鼻猿類研究のエキスパートになった）。当時のわれわれにとって、霊長類学とは人類社会の根底に潜む本質的な仕組みを照らす、もっとも野心的な学問であった。

だが、それから八年後、私は人類学に転向し、南部アフリカのカラハリ砂漠に通い続けることになった。京大に赴任してから数年後、名古屋でアフリカ学会があったとき、大学一回生からの盟友・寺嶋秀明と飲んだ。そのとき寺嶋が驚くべきことを言った。「石油がなくなったら人類は滅びるだろう。早く滅びたほうが地球のために良い……のかもしれない。」私は、人類の一員でありながら「人間中心主義」を破壊するという自己言及性の究極的なパラドックスを果たして乗り越えることができるのだろうか、と考えこんだ。

社会人類学が人類進化論と結合しないかぎり、われわれは人間中心主義の枠内にとどまり続けるしかない。この2つが融合した大文字の「人類学」とは「人間がいない地球」をありありと立ち現れさせる、もっとも根源的な想像力の行使である。福島第一原発の崩壊以来、私に妄念のように取り憑いている思いがある。近代のシステムを生み出

す端緒となった「農耕革命」は1万年前に始まった。いっぽうプルトニウムの半減期は2万6千年である。農耕発明以来の人類史と同じ長さの時間が経っても、プルトニウムから発せられる放射能は半分にもならない。この致命的な毒物を未来の地球に押しつけることほど空恐ろしい人間中心主義／現在中心主義があるだろうか。

人類学の視野からコミュニケーション研究をしていると、「日本文化」のユニークさを称揚する語り口がしぶとく生き残っていることに愕然とする。たとえば「個人（自己）よりも集団の和を優先する」云々。それが美質として肯定されることこそが、私たちの社会を閉塞に追い込んでいる。かつて野間宏は『暗い絵』という短編のなかで、特別高等警察に虐殺された友人の生き方を回想し「仕方がない正しさだった」と慨嘆した。だが、現代社会を覆い尽くしているのは、あらゆる意味での「正しさ」を冷笑し「経済」という名の神にひれ伏す「マテリアル・ニヒリズム」である。そこでは「キミが正義をふりかざしたって会社が倒産したら終わりだろ？」という脅迫が横行する。もちろんこの「キミ」を「市民」に、「会社」を「国家」に置き換えれば、現政権の冷酷無比な支配の論理が完成する。

人類学は未開社会の研究から出発した。だが、かつてレヴィ＝ストロースが喝破したように、真の野蛮さをもっとも組織的に体現したのは、西欧文明である。現代の日本ほど、肌粟を生じさせるような野蛮が生活の隅々までをも蝕んでいる社会は古今に類をみない。川崎の中一殺しの容疑者の実名と顔写真どころか彼の姉の写真までもがウェブ上に流布している。匿名の蔭に隠れた卑劣な集団リンチ。「労働者の権利」「組合運動」「団体交渉権」といった概念は死語と化し、出産のために職場で迫害される女性は「マタハラ」という醜い省略語でカテゴライズされる。「言論の自由」というお題目がとびかいながら、『風流無譚』や『政治少年死す』が闇に葬り去られた戦後言論史にマスメ

ディアが言及することはけっしてない。何よりも私を暗澹とさせるのは、互いに好き合った男女が性交して子どもができる、という生の根幹を支えるもっとも輝かしい営みが、あまりにも困難な事業と化してしまったことだ。それと相即するかのよう、とどまるところなく増殖する「ひきこもり」と「ネット依存」は、他者との共在と交通に宿る謎とときめきを感知する力を若者たちから剥奪している。

めぐり逢わせて同僚になった松村は、病を得てあまりにも早くこの世を去った。そして一昨日、毅さんの告別式に出た。歳をとるほどに喪失が降り積もることはやりきれない悲しみである。その一方で、われわれは確実にあの日々を共にしていたのだと思い返すたびに、生を生きるに値するものにしているのは、仲間との共在と交通でしかないことを再確認する。革命は起こらねばならない。だが、その革命とは必ずしもプロレタリアートの独裁、疎外と虚偽意識からの解放だけを意味するものではない。

近代のシステムは途方もない規模の人口を「幸せに生かす」という「生政治」「生権力」を軸に作動し続けている。このシステムが未来永劫続くことはありえない。いま起こらねばならない革命の目的とは、システムの大潰滅とそれに伴う大量死を回避するというごく消極的なものにすぎない。自分が仲間たちとすばらしい時間を過ごしてきたことを生の拠り所とするならば、人類の速やかな滅亡を願うという、もっともラディカルな反人間中心主義に傾倒することは、私にはできない。京都大学で育まれる知が、上記のような意味での革命へ寄与するものであることを願ってやまない。そうでなければ、現代の大学に存在意義などないだろう。

（すがわら かずよし）

特集 ご退任を迎えられる先生方から

大学施設に透けてみえる時代と社会の精神

伊従 勉 (文化環境学系)



本年度で退場する我々1949年生まれの教員は、新制大学制度による教養部と同じ齢を辿った世代である。69年京都大学入学で82年教養部着任の私は、学生時代から今まで、まさに内外の社会的混乱の年月を大学にいて通り抜けてきた思いを禁じ得ない。教養部を10

年、大学院と学部を20年余担当してきて、教育や研究のほかに職務として引き受けた仕事によって溜まった私文書が数多ある。定年に当たり処分をして、心機一転別の人生を始めるところである。

捨てるに忍びないのは、実現しなかったことどもの資料である。なかでも、建築学科出身であったため、80年代末の教養部改組による学部の施設計画(山崎和夫委員長ほか)を大学の概算要求書に組み込む下仕事に従事したことは、それ以後、大学院設立時の同じ作業と並んで、忘れがたい。教養部建築委員として、また人間・環境学研究科建築委員としての仕事が多量にあり、論文の書けない年もあった。

大学では部局の新設についての理念構築や人的組織については、教員が専ら責任をもって設計するものだが、往々にして忘れるのは施設計画で、従来、それは大学の施設部が担当してきた。通常の部局には建築のリテラシーのある教員がいないからしかたがないが、戦後新制大学の工学部と教養部には建築学関係者がいたので事情が違う。戦前には建築学科の設計教官が、現存する時計台(武田五一)や楽友会館(森田慶一)のように、施設を設計した。戦後も施設配置計画を主導した教官がいた。大学文書館の西山氏が『文書館だより』27で触れた、60年代の「実現しなくてよかった」施設計画には私の恩師が関与していた。90年代の30mタワー型校舎を乱立させる計画(文・法・経・工学部で一部実現)は前計画を全否定した別の教官の構想だった。それも、21世紀に入り京都市の景観政策の変更(高度規制)で頓挫した。時計台

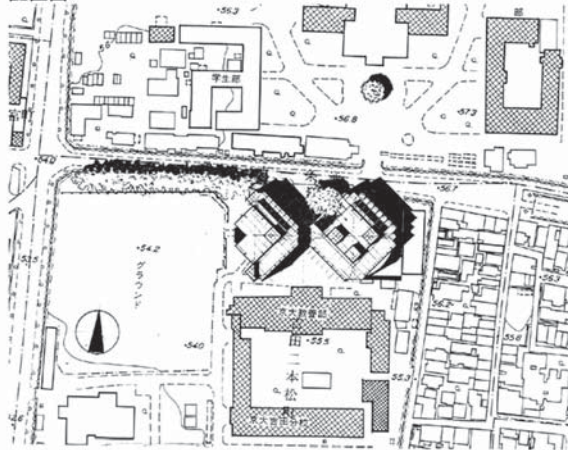
を打ち消す墓標のような高層建物が、吉田神社沿道に残された。どれもが私の恩師や先輩の仕事だが、都市建築の歴史のなかに置いてみれば、前提にした将来像の近視眼が目立つ。

吉田地区の歴代の施設配置計画を回顧してみると、基本理念が大きく三度変更されてきたことが判る。明治・大正期は「兵舎型」とでもいうべきか。中央廊下に直角に東西方向の翼屋が平行に並ぶタイプ。大学病院も旧制三高もこのパターンであった。それが戦前昭和期に中庭型「ロの字」配置に変わっていく(第2期)。戦後の60年代以降は高度20mの「ロの字型」パターンを本部・教養部・理・農学部にまで拡張した。内部空地が外部と遮断され平穏な緑蔭をつくりうるこのパターンは、確かに文学部旧本館・同旧陳列館(いずれも現存せず)などの牧歌的な事例もあり、懐かしいものだ。旧教養部A号館の中庭もその一例だが、メタセコイヤを植えたときに、巨木になることを見逃して、スケールアウトの植栽にしまった。

「ロの字型」パターンはそもそも欧州歴史都市の普通の市街地構成原理の流用に過ぎない。空地を個別に囲い込む敷地労費型だから、多くの場合、凡庸な施設で市街地を埋め尽くし建て詰まる運命にあった。その後に登場したのが、第3期の90年代のタワー型だった。その凡庸さは、当時のポスト・バブル期の都市状況をそのまま引き写しているところにある。

教養部および人間・環境学研究科の建築委員として、4.5haの吉田南キャンパスの将来構想立案に90年当時従事できたことは、たとえ計画に止まったことを考慮しても、都市建築を研究する私にとっては有意義な実践の経験となった。建物の基本パターンは上司の田中喬先生と私(以下「私たち」)が構想した。「ロの字型」の限界と欠点を踏まえ、次の来たるべき建物タイプを方形40mほどのコンパクトな平面にまとめ、中央低層部に二層吹き抜けの地下階段講義室、上層に建物に入る組織の人的交流を促すホールを備え、研究室やセミナー室をこのホールの周囲に配置する建物をイメージした(図1)。延床面積は1棟当たり少なくとも8千㎡以上、敷地占有率を低くして、空地の

● 配置図



● 内部透視図「図書室からテラスを通して棟を見る」

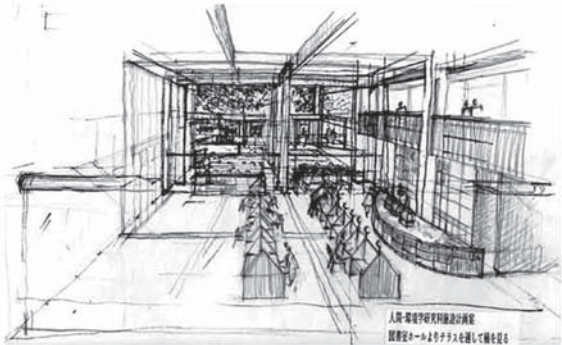


図1 「京都大学大学院人間環境学研究所施設第1期計画案」
(平成4-5年度「概算要求書附属説明資料」)

乏しい大学構内に連続した空地を確保する配置計画が必要になる。

北西部のグラウンドに大きく制約され、南キャンパスは南北に「口の字型」二棟と図書館で建て詰まっていた。人環棟と総人棟を新造する機会は、新たな施設配置に踏み出すか、西側の空いた場所を塞ぎ建て詰まるかを選ぶ最後の機会であった。そのため、規格不足の野球グラウンドを吉田寮側に移動して正式グラウンドとし、跡地を建て替え用の種地にする施設更新長期計画を提案した。ところが、グラウンドが歴史遺産と主張する野球部を中心とするグループの反対によって、あえなくこの将来像は葬られた。南キャンパスには、その後、断片的な空き地を食いつぶして新造建物が次々に建った。今発掘調査中の教育院棟が最後のとどめ、今後、このキャンパスには建て替え場所がなくなる。

欧州の都市計画・政策文化を研究してきた私から言わせれば、京都大学の施設配置計画の失敗は単純な理由による。歴代の将来計画像が時代の変化に対応できなかったことと、それに気づき変更を決断する機会を失ったことである。結果的に個々の建て替えの繰り返しとなっており、大学の外と



図2 Academic Bookshop at Helsinki by Alvar Aalto, 1962-69. (撮影：著者)

変わらない。京都という都市にある大学として、良質の地区計画モデルを示すこともできていないのではないかな。

人間・環境学研究科棟の新設の際、私たちは建物の中心にホールがある建築を提案した。部局の親密さを体現できるホールを、地下講義室の上層に積み重ねる案は、北欧の建築家アルバー・アールトがヘルシンキの町にいくつも建てた建築の理念に学んだものだ(図2)。毎日、大学にやって来ると、誰もがそのホールを通る。教員・職員と学生が顔を合わせ談笑する場が、天空からの直接光に開かれ設けられている。そこからセミナー室へ、講義室へ、事務室へ人々は散っていく。その場所は現在の総合人間学部棟位置を想定していた。しかし、新研究科発足のための当時の学内政治の状況変化によって、私たちは設計から撤退することにした。その結果、他の建築教官が設計したのが、今日の人環棟である。

その人環棟も含め、後に南キャンパスに建築された総合人間学部棟、高等教育センター棟は、どれもが申し合わせたように建物中央や隅に光庭を導入した。それらは、私たちの提案の影響かも知れない。しかし、残念ながら、似て非なるものだ。実態としても精神としても。

建物なんぞ、精神活動とは無関係の容れ物に過ぎない、と考える大学人が多いのであろう。その場しのぎの施設でよいとする通念が国立大学法人の施設の質的劣化を生んではいけないか。具体的な空間で語り時に歌う建築は、設計者や利用者の勝手な思い込みとは別に、良くも悪しくも時代と社会の精神状態の証言である。それを読み取るリテラシーの普及を全学教育のなかで若い世代に伝えようと細やかに試みてきたが、これにて、建て詰まったキャンパスとは「おさらば」である。

(いより つとむ)

特集 ご退任を迎えられる先生方から

住まうことと教養

西垣 安比古（文化環境学系）



大学入学以来、建築学を学んできた。建築学科は工学部に属しており、人間にとって有用な環境を構築するための知を究明することを目指している。工学部である限り有用性を目指すことは自明であり、そこには問いの

発生する余地すらない。たとえば、部屋にテーブルを置き、椅子を用いるとすれば、座面の高さは42センチ程度であり、テーブル天板の高さは70センチ前後になる。我々に与えられた身体の形体や機能に従って有用性を目指して周囲の環境に形が与えられることになる。このテーブルが食事をするためのものであれば、近くに台所が必要になる。その周辺には便所や浴室がつくられ、更に寝室が位置づけられる。こうして住宅が形成される。住宅がいくつか集まると、そこにはさまざまな施設が造られる。

学校や病院といった数多くの施設は適正規模が定められ、それにふさわしい人口をもつ住区ごとに配置される。病院はベッドや車いすの寸法に始まり、各種医療機器に適合する空調システムなど高度な専門知識を必要とする設計が求められることになる。もちろん構造設計に関しても同様に専門化、高度化が推し進められている。

しかし、現代技術の最先端を駆使して造られた施設が有用性のすべてを満たしてくれるわけではない。そのように高度に分化した有用性の根本には「住まう」ことがあり、「住まう」ことにおいてさまざまな有用性が統合され、生きた意味あるものとなるのであろう。それは有用性が失われ、あるいは希薄化してしまった古建築を体験する時あ

らわになる。そこには人がこの大地の上に、天空のもとに住まう、その生の充実に向かう願いが具現されている。現代の我々にとって当時の有用性の目指すところが実感しにくいものとなり、有用性が生い出てくる地盤がかえって表に出て我々に迫ってくるのであろう。現代建築はこの地盤を失いつつあるようにみえる。

学部で学んでいた頃は専門的な知を身につける事で学問の先端を目指し、当時もてはやされていた建築家達にあこがれてもいた。しかし、大学院に入ってしばらくした頃から、「住まう」ことの意味を究明することが建築における根本課題であると考えようになり、日本の古代四文献（万葉集、風土記、古事記、日本書紀）を史料として、住居に関する研究を始めた。遅々として研究は進まず、オーバードクターになって就職もなく日々を過ごしていた頃、韓国からの留学生に案内してもらって、韓国の建築を見学する機会があった。その折、朝鮮王朝時代の住宅をみて、深く興味を抱き、旅の途中で寄ったソウル大学の尹張燮先生の元に留学することになった。その後、朝鮮に儒教が定着した16世紀頃の士大夫、宋純、金麟厚、梁山甫、李退溪などが、住まうことをどのように捉えていたかをめぐって研究をするようになった。そして、近年は日本の鎌倉初期、明恵や鴨長明などにも関心の幅を広げている。いずれにしても、この四十年ほど「住まう」ことをめぐって考えてきたことになる。

「住まう」ことの意味を問う時、思惟は人間の欲求の先端に向かうのではなく、その根拠に向かう。京都大学の人間・環境学研究科に来て以来、教養科目を受け持つようになり、教養ということの意味を考えるようになったが、専門的な工学の知は「～のために」という有用性を限りなく分節し、さ

らなる先を目指す、教養の知はその根拠を耕すことを目指すのであろう。建築の分野でいえば、「住まう」ことをめぐる知こそ、この教養にあたるようになる。朝鮮における16世紀は旧勲派（従来からの貴族層）から士林派（朱子学を信奉する新興の集団で地方に根拠を持つ）へと権力が移る変革期であり、鎌倉初期は貴族から武士への権力移動があった。このような大変革の時代には不安が社会を支配するようになる。しかし、そのような時代においてこそ「住まう」ことへの自覚が深まり、教養が求められるのではなかろう

か。現代社会を振り返ってみれば、やはり深い不安に包まれている。教養の復興が唱えられるべき時代にさしかかっているように思われる。

最後に、私の設計した住宅の写真をご笑覧いただきたい。長年の「住まう」ことをめぐる思惟の結晶であればいいが、教養のなさを示すにすぎないものとなっているかもしれない。評価はお任せするしかないが、依頼があれば今後も細々と設計に携わっていこうと考えている。

（にしがき やすひこ）



南禅寺「梅壺の家」



南禅寺「梅壺の家」



大徳寺「草庭の家」



大徳寺「草庭の家」

特集 ご退任を迎えられる先生方から

化学実験の思い出

山本 行男 (自然科学系)



在職中の思い出として、2006年（平成18年）前後の「基礎化学実験」立ち上げに関わったことを記します。

1987年7月、教養部に着任しました。第2次ベビーブームに対応した

学生の臨時増募に伴った教員増員枠での採用であり、何かの事情があったのでしょうか、4月ではない時期での着任となりました。その年度の授業は既に走っていましたから、途中着任の私には講義担当はなく、実験授業にだけ参加することになりました。当時、化学実験には1回生向けの「一般化学及び同実験1」と2回生向けの「一般化学及び同実験2」があり、それらを担当する化学教室の教職員団はそれぞれ独立しており、私は2回生向け実験の担当となりました。1993年、総合人間学部設立と同じ時期に、それら実験授業は「分析及び環境化学実験」と「合成及び測定実験」に改編されましたが、その内容と運営組織には大きな変化はありませんでした。ところが、国立大学独立行政法人化の前後から、全学共通科目・化学実験授業を取り巻く状況は大きく変化し、私自身もそれに深く関わるようになりました。

始まりは工学研究科の桂キャンパスへの移転でした。当時、そして現在も、化学実験授業への他研究科からの応援は大きな柱の一つで、特に、工学研究科からの応援は最大のものでした。「今までと違って往復に時間がかかりかかるので、負担を

減らして欲しい」という要請があり、これは至極当然と思いました。加えて、独法化以降、非常勤講師の削減も求められました。これらの要請に応えられる実験授業の実施体制変革に着手したのが2004年でした。はじめは、まさしく数合わせでした。支えるメンバーが減った状態で授業を実施するには、二つのものを一つにするしかない。2回生向け実験を廃止して、その内容を取り込んで、1回生向け実験を再構築して「基礎化学実験」として提供するアイデアで進めようと思いました。

たとえ「これしかない」としても、物事はそれに向かってスムーズに進むわけではなく、ひとの思いが交錯して紆余曲折しながら約1年かけて、「基礎化学実験」の形を作り上げていきました。それで工学研究科の負担を少なくすることができ、一応、工学研究科には納得してもらえました。しかし、単なる数合わせに終わらせてはいけないという宿題もありました。ゆとり教育世代の入学、いわゆる2006年問題に対処できる理系基礎科目、特に十分な実験教育を受けないで入学してくる学生への対処という課題です。そのため、できるだけ化学全体をカバーする内容で、専門教育で必要とされる実験操作法を習得できる実験課題を精査しました。さらに、他大学のテキストを勉強する中で、京都大学の全学共通科目の化学実験授業の特色は何か考えました。

次に、現場を見ようと多くの大学の1回生向け化学実験の見学に行きました。東京大学駒場キャンパスから始まり、大阪大学、北海道大学、東北大学、慶応大学、立命館大学と実験内容とともに



出前授業で中学生に講義をする。

運営方法、さらに、履修生の様子を見学しました。この体験は自分たちの実験教育を相対化させるのに大いに役立ちました。京都大学の「基礎化学実験」の根幹となる教育姿勢は「受講生一人ひとり、はじめてから終わりまで自分でやる」ことにあることが再確認できました。自分の手を動かして、はじめて、現実的な物質観を養い、目の前の現象を原子・分子の観点から議論できる力を付けることができるという考えです。

2006年、林哲介先生の後任として高等教育研究開発推進センターに移籍しました。誰に頼まれたわけではなく、全学共通教育に尽くそうという決意表明でした。同じ頃、同僚の先生が「総長裁量経費をとりに行きましょう」と提案され、申請書も一気に書き上げてもらいました。その前年も総長裁

量経費を頂いて機器と用具の整備はしていましたが、経費の半分はかねて思い描いていたプランに使用させてもらうことにしました。それが下の写真にある実験操作の動画資料です。その後、高等教育研究開発推進機構と京都大学 K.U.PROFILE (G30:国際化拠点整備事業) から資金を頂いて、31本の動画をそれぞれ日本語と英語の解説を付けて作成しました。同時に、英語版実験テキストも作成しました。

<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/operation/>

化学実験に馴染んでおらず、実験器具の使い方が分からない受講生が、戸惑いなく実験をスムーズに開始できるようにするのが、その狙いです。現在、「基礎化学実験」に大いに活用されています。また、Web 公開して誰でも自由に利用してもらえようにしたところ、色々なところから使用させてほしいと依頼が来ています。

新しい実験授業を作り上げ、さらに、時期が重なった新実験室への移転に伴う運営組織の再構築に、化学関係の教職員の方々は本当によく頑張られました。意見を戦わせながら問題に対処していったことは、今となってはよい思い出です。最後に、次年度以降も様々な外圧の中で奮闘される皆さんのご健闘をお祈り申し上げます。

(やまもと ゆきお)



京都大学 全学共通化学系実験科目ホームページより
<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/operation/>



特集 ご退任を迎えられる先生方から

京大での生活を振り返って

松井 正文 (自然科学系)



大学院時代

大学受験ラジオ講座で聞いた「紅萌ゆる」の歌から憧れた時計台を毎日見る夢が破れ、4年間の地元での学部生活をした後、幸いにも学園紛争がほぼ終わった京大理学部

の大学院に入った頃は世界が輝いて見えた。動物学教室の図書、雑誌はどれも宝の山だった。他教室のゼミに出て、議論に言い負かされない技も学んだ。初めて本格的に取り組んだ脊椎動物は何をやっても珍しく、興味が湧いた。好きなように研究することを許してくれ、余計な口出しはしないが、書いたものは事細かに見てくれ、後に役立つ知識を教えてくれる指導教官に恵まれたのも幸せだった。その一方で慣れない生活で体調を崩し、材料のヒキガエルもなかなか採れず、修士の初めは悩み多き時代でもあった。しかし、多くの先輩や友人の助けもあって研究は軌道にのった。何しろ、当時は国内には広島の大きな施設以外には両生類の研究者は数人しかいなかったから、何をやっても新たな発見があった。まさに大学院時代は夢の時代だった。アルバイトも見つけ、衣食住は切り詰めて貯めた金をつぎ込んで、あちこちに採集にでかけ、また学会にも出てたくさんの人とのつながりもできた。魚類や哺乳類の研究者とも懇意になり、その後の大きな糧となった。そして、博士2年目の春に就職の話がきた。応募することにし、幸いにも夏にはそれが決まった。新たな職場

での仕事を想像しつつ、やりかけていた仕事の整理に追われる晩夏だった。

教養部時代

1975年の秋、助手として迎えられた教養部生物学教室は暖かい雰囲気職場だった。すべてについてお世話になった故小林恒明先生をはじめ、故吉井、掘田、相良各先生はマクロ生物の同好者として、また丸山先生はじめミクロの先生方も丁寧にあれこれ教えて下さった。研究費も平等で、成果を出さねばという気にさせてくれた。教養部自体も実に自由で、教授会にも出席でき、新任教官や、ときの問題を知ることができた。とは言え、いまのようなTAの存在などは思いもよらぬ時代である。実習室の整理整頓から始まり、極めて多数おられた非常勤講師の、時には頭にくるような注文をこなしていれば、自由になれる時間は5時を回ってであった。それでも慣れは恐ろしいもので、仕事はじきにうまくこなせるようになった。新しい助手で若いのだから、と無理も押し付けられたが、そんな中から学んだことは後に大きく役立った。助手2年目の夏休みは、吉井先生のマレーシア探検があり、留守番をさせられた。この頃に部屋によく来てくれるようになったのが、農学部の新入生で、現在は押しも押されぬ大教授となった加藤さん、曾田さんであった。大台ヶ原調査では公用車の中で3人縦になって泊まったり、実に楽しい時代だった。助手4年目に初めての海外調査が始まった。まだ道路も舗装されていないキナバル山麓にジープで辿り着き、夜の溪流で出会っ

たカエルたちはすべてが珍しかった。実際に、このわずかの期間に出会ったカエルたちの多くは後に新種となった。

目紛るしいその後

海外調査はその後隔年に行ったが、通年授業がある教養部では、最大2ヶ月夏休みに出かけるしかなかった。しかし、そんな自由をさせてもらえたことも有り難いと言いか言いがたい。時代は変わって助教授になると、会議に駆り出されることが多くなり、改革委員会は頻度を増して、すぐ来いとの電話でやりかけの実験を駄目にする始末だった。そうして新しい大学院ができ、我々たった4人が基幹講座に入れられた。その日以降教養部からは、もう面倒は見ないと言われ、教授会からは追い出され、手紙や荷物の運搬も事務ではやってくれなくなった。私のような気性の人間がどう感じたかはご想像の通りである。教養部が学部

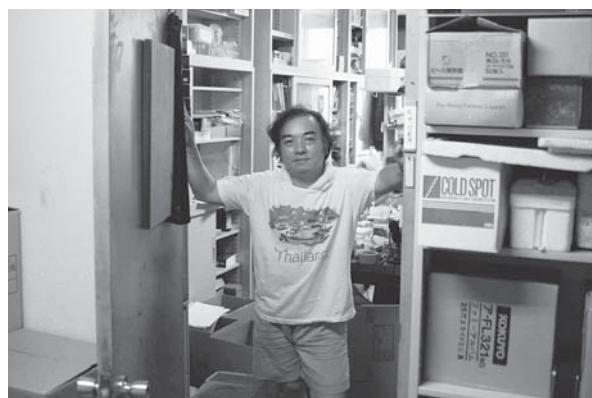
化したときも、ほぼ蚊帳の外であり、出たくもない記念の会に出た事くらいしか覚えていない。大学院は入試倍率も高ければ、意味のない英語足切りがあったり、入学しても訳の分からない授業が必修になっていた。多くは改正（悪？）されたが、この院のあり方が、現在、ますますその悪影響を高めつつある文部省の方針の先駆けであったことは間違いない。いま変えようとする方も多いらしい院や学部の名前にしろ、当時文部省が示した選択肢の組み合わせにすぎないことを考えれば、名がついてからその意義を跡付けするほどの価値があるのか甚だ疑問である。

残られる皆さんの期待に答えて（?）、最後は私のイメージ通りであろう雑言で終わるが、まだ自由が残っている間に、愛してやまないこの大学を去れることに感謝し、皆さんの今後のご発展を衷心からお祈りするものである。

（まつい まさふみ）



上 日本爬虫両生類学会（駒ヶ根市）にて（1995年11月）
下 松井研究室のメンバーと（2007年3月）



人間・環境学研究科棟への引越し前のひとこま（1996年8月）

外から見た総人・人環

動物と人間の動きに想う

小田 伸午 (関西大学人間健康学部・大学院人間健康研究科 教授)



はじめに

京都大学に27年間お世話になり、新設の関西大学人間健康学部に移って3年半が経過した。

人間が自然に動くとはどういうことだろう。自然な走りこそもっとも高いパフォーマンスを生み出すのではないかな。自然

な走り、自然な動き。それは動物の動きの中にあるのかもしれない。人環、総人で27年間体育教師とスポーツ科学研究者の二足の草鞋を履きかえる日々を送るうちに、いつしか、このようなことを考えるようになった。

動的安定

筆者はペンギンの歩き方のまねを学生にやらせることがある。学生たちは、ペンギンのヨチヨチ歩きを想像して、着地した足のほうに体幹を傾けて、着地足の真上に身体重心を乗せてしまう。

ペンギンはそのようには歩かない。右足が着地して左足を踏み出すときに、からだ（身体重心）は右足の方に倒れるのではなく、踏み出す左足のほうに倒れていく。この動きだと、着地したときに静的バランスが崩れていて、動かないとバランスが取れない。この状態を動的安定という。不安定の安定ともいえる。ペンギン歩きを模倣してみると、静的バランス（静止状態）を崩せば、力感の少ない動き（動的バランス）が生じる、ということを実感する。

人間の幼児の歩きも動的安定である。体重をこれから着地する足にかけていくペンギンと同じ動きだ。筋力の衰えてきた高齢者の歩き方にも動的安定がみてとれる。高齢者の歩行の特徴は、やや歩幅が短く、左右の足幅（歩隔）が広いことだ。つまり、動的バランス状態の歩行である。高齢者の筋力は確かに衰えている。赤ちゃんの筋力も未発達状態である。若者や健康成人の通常歩行に比

べて劣った歩行であるという思いを持つ人が多いかもしれない。

動物から学ぶという視点に立つと、赤ちゃんや高齢者は、筋肉の力は少ないながらも洗練された歩き方をしているとも言える。こう考えると、人生の最初と最後は洗練されていて、その中間は力任せの傲慢な歩きをしているなどと思ってしまう。

幼児教育も高齢者の介護も、劣ったものを何とかするというネガティブ発想ではうまくゆかない。洗練されたものであるという逆転の発想をベースにすることでポジティブな未来が見えてくる。じっと一箇所に留まる静的安定を崩して歩む様子は、まさに人生だ。人間のからだや体の動きを人生に例えるくせは、教育と研究の二足の草鞋を履き変える人環・総人にいたからであろうと、離れて強く意識するようになった。

一流選手は、動物の動きに興味を持つようだ。アムステルダムオリンピックの三段跳で優勝した故織田幹雄氏にお話を伺ったことがある。氏は動



遊脚側に体重を乗せる
(ペンギン歩き)



支持脚に体重を乗せ
(間違ったペンギン歩き)

物園に足繁く通って動物の動きを観察したそうである。サルが枝から枝に飛び移るイメージを三段跳に結び付けたそうである。中国の馬軍団の女子選手たちが世界の長距離界を席捲したことがあった。馬コーチは、シカとダチョウの走り方を研究したと語った。

動物の動きを観察することで、人間のなかに潜む動物としての本能的な動きを引き出すことができるのかもしれない。他者の動きを見ると、見た人の脳のなかの見た動きに関係する運動関連領域の細胞が活動するというミラーニューロンの話を聞かせていただいたのは、同じ講座のサルの脳活動を研究する神経科学者の船橋先生であった。

人類は、生命誕生からの37億年の長い進化の過程（歴史）の最先端にいて、今も、刻々進化の新陳代謝を止めないでいる。将来人類になるであろう人間の先祖だった動物は、かつて四足で走歩行をしていた。現代人が、四足動物の動きをみてミラーニューロンの活性化をはかるのは、今と過去が進化の時空を飛び越えてつながることともいえる。

意識と無意識

動物はももを高く上げて歩幅を伸ばして歩こうなどとは思わない。動物にそのような意識があるかないかは動物になってみないとわからない（なってもわからないかもしれない）。追いかけた獲物を逃したライオンが、どうも今日はものの上がり方が悪かった、などと意識はしない（であろう）。次の狩りまでに、もも上げの練習をするライオンがいたら出てこいといいたくなる。人間は筋力トレーニングをして、筋出力能を向上させて、スポーツパフォーマンスを上げようとする。人間という動物だけが不思議な行為をすることに気がつく。

幼児の動きを見ていると、動物に近いものを感じる。幼稚園の運動会の徒競走で、応援席の母親に近づこうとして外側のコースを走り続け、悠然と最下位でゴールを切る幼児をみかける。競争という概念を知らない様はむしろ微笑ましい。ウサイン・ボルト選手も、北京五輪の100mで優勝したとき、最後の10mを正面スタンドの方を向いて欽ちゃん走りのおどけてみせた。ボルト選手は幼稚園の運動会のところでオリンピックを制したのかもしれない。悟りの境地に達していたといえよう。

北京五輪男子400mリレーで銅メダルをとった朝原宣治選手にお会いしてお話を聞く機会があった。世界を転戦して、100mを9秒台で走る黒人選手にいろいろ聞いてみたそうである。地面と

の接地の技術をどう感じ、考えているのか。強くけるのか。それとも、ひっかくのか、と。かえってきた返事は、お前は何を言っているのだ。質問の意味がわからない。コーチはいろいろ速く走るための原理は教えてくれるが、あとはどう感じ考えるかは、選手任せだという。走るときは、無意識で走っているというのだ。まったくもって動物的である。野生とも言える。

人間には意識があり、知能がある。動作を外から観察し、スポーツ科学の力を借りて、速い選手の動作がこうなっている、ということを客観的に分析する。そこから速く走るための原理、原則というものが見えてくる。原理を語るためには意識による分析行為が不可欠である。分析項目を増やせば増やすほど分析知も増えてくる。分析科学が進み、スポーツ現場に分析結果が伝えられると、からだのあちこちを、あーして、こうして、それからこの部分もこう意識して、...、ということになる。動作の意識的分解はスポーツ科学の宿命かもしれない。

科学がみつけた原理のとおりには走るには、観察や科学分析から得られた何かを意識して走ればいいのかというとそうではない。様々な意識過程を経て練習を繰り返したとしても、到達すべき究極は、無意識に自然に走れ、なのである。科学は意識する方向に進む。スポーツ実践は無意識の方向に進む。スポーツは頭（意識）で考えて、からだ（無意識）で実践する。体育教師の実践現場と、動作研究の間を往ったり来たりしてみえてきたことである。

人環・総人では、教育の現場と研究の現場を行き来する環境があった。そこには研究する自分と、現場で生きる自分の対話があった。二つの世界は矛盾するのか、矛盾しないのか、考えなければならない世界があった。いまでも、その対話は止める気配をみせない。

止まらない、、、それは動的安定、、、矛盾していて、矛盾していない。これは止まらない。

（おだ しんご）

東京大学教育学研究科博士課程（体育学）単位取得満期退学。京都大学博士（人間・環境学）。専門はスポーツ科学および神経・筋肉生理学。スポーツ動作における主観と客観のずれや、筋出力発揮におけるの筋神経活動などを専門に研究している。京都大学教養部助手、同助教授、京都大学総合人間学部助教授を経て、平成15年京都大学大学院人間・環境学研究科助教授。平成17年より京都大学高等教育研究開発推進センター教授（協力教員）。平成23年4月より現職。

外から見た総人・人環

・（なかぐろ）の意味

三谷 恵子（東京大学文学部・大学院人文社会系研究科 教授）

東京生まれで、東京以西のことはほとんど知らなかった私が京都大学大学院人間・環境学研究科に赴任したのは平成11年、それから13年間をこの組織で過ごし、この間に、諸先生方また学生さんたちから多くのことを学びました。総人・人環の教員には、学部と大学院での教育研究指導のほかに、全学共通教育への貢献という重要な任務があり、エネルギーにその責務をこなしていられる同僚の先生方には遠く及ばないものの、教養教育のあり方についてもいろいろ勉強させていただきました。そして平成25年、吉田山を窓から望むキャンパスを去り、東京大学に移りました。

昨今の大学、とくに京大や東大のような大規模な大学では、組織－そして組織名－が複雑化し、名称だけでは何をするとところかわからない部局や専攻も少なくありません。たとえば東京大学のHPをみると、“人間環境学専攻”－あらどこかで聞いたような－いまさらながら、いったい何を研究するのかと思ってしまう組織名をもったところがあります。さっそく探してみると、こちらの人環（ジンカンというかどうかは知りませんが）は新領域創成科学研究科に設けられた一専攻、一口でいえば工学系の学問をすることで、私のような文系語学屋には縁遠い世界なのでした。同じ「人環」なのに－あ、いえ、同じではありません、京大の人環には東大のそれにはないものがありました。それは京大人環の正式名称にある「・」。東大のみならず、今や全国に「人間環境学」と名のついた学部や専攻がありますが、「・」で「人間」と「環境」を繋いでいるのは吉田キャンパスのジンカンだけではないでしょうか。

一般に「・」は「二つ以上の名詞を並列するときの区切りなどに使う記号」（『大辞林』）とされます。たとえば人間と社会について述べる時、「人間、社会」と表記すれば、これはこの二つをそれ

ぞれ独立した概念として等位的に扱っていることを示します。しかし一つの述定の中で、別の概念と対峙させながらこの二つを関連付けて扱う場合には「人間・社会」のほうがその意図をよく示すものとなるでしょう。いっぽう「人間社会」と・を使わずに表記すると、もちろんこれは「人間」が「社会」を限定する複合語、発音すればアクセントも変わりますね。侮るなかれ、なかぐろ、なわけです。

ではこれを「人間」と「環境」に当てはめると、どうなるでしょう。「・」なしの場合には、さまざまにある「○□○□環境」－自然環境、社会環境等々の中でとくに人を主体とした環境についての問題であることを明示していることになるでしょう。じっさい東大の「・」なし人環は、環境学系という組織の中にあり、とくにヒトによって工学的に作り出される環境について研究する専攻であるようです。

では「・」ありの人間・環境は、そしてこれに「学」がついたものは、何を意図するのでしょうか？ 先の「人間・社会」の例に倣うと、これは「人間」と「環境」という、それぞれが独立しながら密接に関連した二つのカテゴリーについての学問、その他の既存の学問が対立項となるような領域についての研究ということでしょうか。だとするとこの研究科の研究対象は、人間と環境、それぞれ、かつ両方？－さてここからが悩みどころです。

まず「人間」について。ふつうに考えて、人間について学び研究するとなるとこれは医学も経済学も文学もパズル学（！）も、人に関するあらゆること含め学問となります。たしかにジンカンの、一騎当千の諸先生方の顔ぶれを思い出すと、こういった組織名があり得るのもわかる気もしますが、それでも、すべてが専門的に細分化された現代の学問世界において、既存の、人間にか

かわる諸専門分野のたんなる“寄せ集め”ではない、それらを超えた、あるいは包括する学問としての人間学というものがはたして成立しうるのかどうか、これはなかなか難しい問題です。

「人間・環境」としたとき、人間以上に厄介なのは「環境」です。環境とは「とりまくもの」、英語の environment も、もとはフランス語の environner 「取りまく」から来ているとか。ならば「環境」にはとりまく対象があるはず、とりまくべき中心がない環境はありえません。もちろん、「環境」という言葉自体はしばしば「環境が良い」とか「新しい環境」「環境破壊」のように単独で用いられますが、こういった使い方の場合、けっきょくのところ環境の中心にあるのは人、その周囲を認知し、何らかの形でこれを範疇化し、あるいは働きかける主体です。「環境破壊」の例では、環境という語は「自然」とほぼ同義のようですが、いっぽうで自然＝環境ではないことは、たとえば「自然観察」の意味で「環境観察」とは言わない（ふつう言わないでしょう？）ことによって示され、ここからやはり「環境」という言葉を使うとき、その中心には人間の存在が暗黙のうちに想定されていることが理解されます。なのでそうでない「環境」について問題とする場合には、「ナントカ環境下における××について」と状況を限定する言い方になるわけです。ではジンカンの、この何もつかない「環境」はやはり、人間をとりまく環境ということになるのでしょうか。それとも人間抜きの、何か別のもののまわりにある環境なのでしょうか？

こう考えていくと、さて人間・環境学とは、いったい何なのでしょう？人間に関する諸事象を、既存の学問分野の寄せ集めではない形で総合的に研究し、かつ、何を中心とするものかはよくわからないけれどもとにかく環境について研究する学問－はたして、このような学問が、学知の体系として成り立ちうるのでしょうか。この問いに自ら答えるとするなら、私はこう言うでしょう。おそらく、枠組みありきの学問としての「人間・環境学」は存在しない。しかし、このなんだかよくわからない、一見ばらばら、あるいは個別の専門分野の寄せ集めの諸研究の中に、自分の関心を軸としたなんらかの関連性を見出し、その関連性に参照しながらあらたな方法論を構築しようとするなら、その試みの中には存在しうる、と。このことは、ほ

んらい総合的であることを含意する「人間学」になんと「総合」までついている「総合人間学」についても言えることにちがひありません（ちなみに総合人間学はけっして「総合・人間学」にはなりませんね）。

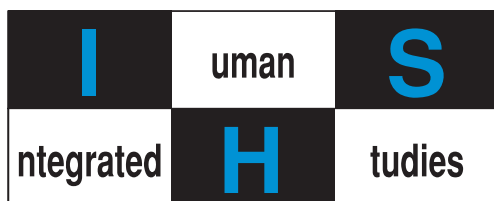
「人間環境学」でもなく、「人間、環境学」でもない（もちろん「、」つき部局なんて文科省が認めないでしょうけれど）人間・環境学は、この名称をもった組織に所属する学生、研究者一人一人の中にあるものなのだと思います。すべての大学にとって前途多難な時代の中、ジンカンそして総人の教員、学生の皆さんがそれぞれの総合人間学、人間・環境学をどう作り上げていくか、遠くから拝見していきます。私が今いる文学部はある意味旧弊な世界ですが、この中で私も、京大ジンカンで模索した「人間なかぐる環境学」をさらに追求していきたいと思っています。

（みたに けいこ）

東京大学博士（文学）。専門はスラヴ語学。スラヴ語の通時態と共時態の双方を見ながら、言語域としての中・東欧地域の文化の諸相を研究している。東京大学文学部助手、筑波大学文芸言語学系講師・助教授を経て、平成11年4月に京都大学大学院人間・環境学研究科に助教授として着任。平成17年4月より同教授。平成25年4月より現職。

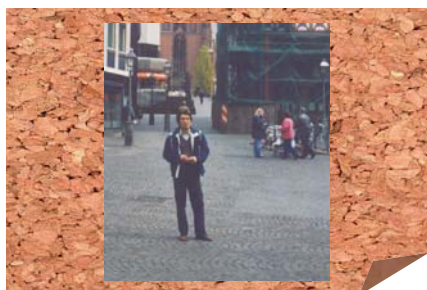


2013年8月 ベラルーシのボラツク市にて



編集後記

◆『総合人間学部広報』第54号をお届けいたします。
この3月も、総合人間学部および人間・環境学研究科の発展にご貢献下さった個性あふれる先生方が、ご退任なされます。また、シリーズ企画「外からみた総人・人環」にも、お二人の先生から御寄稿いただきました。大学を取り巻く厳しい社会情勢のなか、私たちが今後何をなすべきか、諸先生の文章を噛みしめながら考えていきたいと思います。(K・K)



人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会